

## II 講演

### 『身体表現・他者を演じることによる気づきと教育への応用』

元シルク・ドゥ・ソレイユ、パフォーマー

宮 海彦

○司会者　まず初めに、講師の先生をご紹介します。

宮海彦様は幼少期から様々なスポーツに打ち込み、高校では体操でインターハイ種目別優勝。全日本ジュニア選手権で2種目優勝されています。2004年本学経営学部を卒業し、卒業後、青年海外協力隊としてパナマ共和国に派遣され、現地で体操のコーチとしてパナマナショナルチームの強化、組織運営および裾野の拡大、未開地域での体育教育の普及に従事されました。協力隊解散後も海外で体操コーチとして働き、2009年から2018年の9年間、シルク・ドゥ・ソレイユパフォーマーとして在籍され、世界50都市以上で3000回以上公演され、1,000万人近くを動員しました。退団後、2022年2月より農業とエンターテインメントを掛け合わせた農業の素晴らしさを伝えるプロジェクト「農タメ」を熊本県菊池市でスタートされています。現在までに50回ほどのイベントを開催し、これまでに延べ1000人以上の参加者に体験を通して農業や自然の楽しさを伝える活動を行っています。

それでは、宮海彦さん、どうぞよろしくお願いいたします。

○宮　ありがとうございます。私も明治大学の出身でございます、また去年も文学部でお話しさせていただきましたが、今年もこうして明治大学に呼んでいただけて大変ありがたく思っております。昨年よりも、私も知識と経験がパワーアップして帰ってきたので、ちょっとだけ昨年よりも情報等、お伝えできることに広がりを持たせられるかなと思っておりますので、また今年も楽しくお聴きいただけたらと思っております。よろしく申し上げます。

第一に、私はずっと体を使った表現者としてここまでできました。普段はオンラインでフィットネスも教えております。そこで、毎回必ずお伝えするのは、私たちは健康でないと何もできないということです。これは誰にでも万人に共通することなので、ぜひ皆さんにも健康でいていただきたい。健康でないと皆さんここまで来られなかったはずですし、これからお仕事、もしくは楽しい個人の趣味もできないと思います。そこで本日一つだけ、昨年僕はまだできていなかったちょっとした治療をできるようになり、皆さんの体にも良い方向に影響できると思うので、ちょっとだけ披露させてください。「この中で肩こりがひどい方いらっしゃいますか？」これ実は自分で治せますし、ちょっとした時間で肩が軽くなります。本当は骨盤骨格が一番大事ですが、今日は一番効果が分かりやすい肩こりの解消を皆さんにさせていただいて、その後でしっかりと僕の話に集中していただけるようにと思っています。

私が習った操体法、これは筋反応、体の骨格調整をするやり方で、自分で治療ができ、僕

が一番望んでいた治療方法です。僕もスポーツをやっていたし、シルク・ドゥ・ソレイユも体のメンテナンスにすごい時間と労力をかけていました。でなければ、パフォーマンスがでなかつたので、これを僕は現役時代に知っておきたかったなという方法の一つです。でも、これは一般の方にはかなり通じるものなので、一つずつやっていきましょう。では、最初に交互に肩を上げてもらって、どちらが上げやすいか。では右の方が上げやすかったということなので、鼻から息を吸って、口からふうっと息を吐くときに、この右肩だけをぐっと上げて欲しい。その時に僕はちょっと押さえます。これを3回やっていきます。今の感覚をもう一度やってみて覚えていただけますか？肩を上げ下げしてみてください。どのくらいの重さかを確認します。はい、ではここから治療に入っていきます。では鼻から息を吸って。ふうっと口から息を吐いて右肩上げます。吐き切ったら、ストンと力抜きます。一度深呼吸しましょう。これをあと2回続けます。では、これで右肩左肩をもう一度上げ下げしてみてください。「軽さどうですか。軽くなった。これ、サクラではないです。」だんだんと良くなる方法があって、次はここから上げやすかった方の右肩に圧力をかけます。今度は上げにくかった方を下にぐっと押さえる。それを交互どっちにもプレッシャーをかけていって、同じように3回やって、最後に両肩を上げます。それをまたぐっと下げていきます。これやっただけで相当肩軽くなります。ただ、これは一時的なものなので、一瞬軽くはなりますが、この筋反応を使って筋肉を緩める、これを操体法といいます。そして操体法の中の快い医学と書いて快医学と言いますが、こうやって自己治療能力を高めていく。こういうのを骨格調整だったり、膝だったり、色々なところに応用できる。本日は分かりやすい肩こりでやりました。皆様の健康、僕もそうですし、色々な方の健康がこの世界を良くしていく一つの重要なものだと思います。先生方はどうしてもパソコンの前にはずっと座りっぱなしになっていると思うので、是非健康にも注意しながら、この講演を聞いているときも時々体を動かしてあげて、いい体を作っていただけたらと思います。

では、本日のテーマです。僕が表現者として伝わったかどうかをすごく大事にしているので、『伝わったか』、これをテーマに最初にお話しさせていただきたいと思います。私の人生や経験談が少しでも皆様にお役に立てたらと思っています。

先ほどちょっとご紹介いただきましたが、幼少期から体操競技をやっておりました。先輩はですね、塚原直也さん、ここの卒業生です。塚原直也さんの後輩で入ってきました。それから、別の大学ですが、内村航平さんは後輩です。先輩を追って、オリンピック目指して明治大学に入りましたが、大学生の時に色々なことに興味が向いてしまい、練習をおろそかにした期間があり、オリンピックには残念ながら届きませんでした。その後、人生に挫折した感じもありましたが、それをどうこの後に繋げていこうかなと思い、就職活動は全くしませんでした。海外に行きたい思いがずっと強かったので、青年海外協力隊に応募して、2年間パナマで自分の経歴、体操競技を生かして、指導者として携わりました。パナマでは自分の人生を180度変えるような出会いや経験がたくさんあり、今の僕は、あのパナマでの経験がなければここにいないと思います。その影響でその後、アメリカに行きましたが、当時、英

語が全然喋れませんでした。スペイン語はペラペラだったのですが、英語がダメでした。それで、国連に勤めている方々やフィールドワーカーの方々とお会いした時に、こんなにも優秀な人たちがいるということを痛感して、僕は自分の無知さ、知識、経験の無さに愕然としてしまいました。もっと経験を積みたい、しっかりと英語を喋りたい、今後は国際社会に貢献していきたいと思い、アメリカに行って体操競技の指導をしながら英語の勉強をしていました。ただその中で、僕がオリンピックに行けなかった後悔の念がふつふつと湧いてしまいました。指導者になってから、なんでもっといい練習ができなかったのかなっていう後悔がどんどん膨らんでしまったので、その後悔を払拭するために、もう一度自分が持っているであろう才能をフルに使い切りたいと思い、シルク・ドゥ・ソレイユに応募し、合格させてもらって入団しました。そこから約10年ツアー生活をさせていただきました。

今は役者という仕事に転身しました。シルク・ドゥ・ソレイユを引退した後、舞台役者として監督から役をいただき、実は明後日からスペインに行ってきます。舞台役者として、今、世界の舞台に立っています。

青年海外協力隊の時に本当に大事な、これはちゃんと残しておかなければいけないなと思ったのが農業と自然環境です。この思いがずっとあったので、これをしっかりとまた社会に残していくためにどうしたらいいか。これが今回僕も伝えたいことですが、伝わらないんですよ。これ大事だよって言っても伝わらなかった。その経験があるので、どうしたら伝わるのかってのをずっと考えながら生活していました。そういうこと考えながら、僕は自転車で日本一周しました。東京から始め、自転車でぐるっと千葉から茨城、青森まで行き、南は屋久島まで行って一周して、今、熊本県の菊池市に住み、農業とエンターテイメントを組み合わせた農タメという活動をさせてもらっているというのが現状です。

役者として、もしくは僕一人の人間として大切にしていることが一つあります。伝わらなければ表現ではないということですね。これはすごく強い言葉です。僕自身にも戒めの言葉としていつも心がけているのが、この伝わらなければ表現ではない。言ったからって伝わっていないのではないか。これが僕の中でいつも表現者として気にしているところです。

皆様に紙をお配りしましたが、今、実験してほしいことがあります。では紙に3つのことを、隣の方を見ずに書いていただきます。1つ目です。初めに、紙の真ん中に丸を5つ書いてください。では2番目。次に紙の角に星を3つ書いてください。これ、うまい下手はあまり気にしないで大丈夫です。では最後です。丸を囲むように三角を書いてください。さあ皆さん、どのようなものが書けましたでしょうか？これが色々な事例になります。僕が今言った、丸を真ん中に5つ書いてください。そして星を3つ紙の角に書いてください。で、最後、その丸を三角で囲ってください。同じ言葉を言っても、これだけ表現方法、受け取り方が変わります。この結果は、正解は一つもないし、どれも正解です。これだけ僕がたった3つのことを言っても、これだけ違う受け取り方をします。これほど自分が思っているイメージをそのまま伝えるって難しいっていうのをちょっと皆さんにお伝えしたいし、僕もいつも心がけています。伝えるというのが簡単ではないっていう前提です。解決方法はないってことを僕はあまり言いたくないので、じゃあどういうことをしていきましょうかってこと

をお伝えしましょう。

では質問です。学校に生徒や学生は本当に学びに来ているのでしょうか？先生の肌感覚でいいです。今、生徒や学生に学びの意欲が少ないのではないかって思う方、正直に手を上げられますか？私も明治大学を卒業させていただきましたが、申し訳ないですが、学びの意欲は低かったです。

この言葉ご存知ですか？「馬を水辺に連れて行けても、水を飲ませることはできない。」これは、英語の表現です。慣用句ですが、馬を人間が水辺に連れていくことはできますが、飲みたくない水を飲ませられないっていう表現で、相手の行動を変える、相手がやりたくないことをやらせるのは難しいということです。では、どうしたら、やりたくない人に、やりたくなるようになってもらえるのか。これ、先生たちの命題なのではないかと思います。学びたい人はもちろん積極的にきてくれるし、その意欲があるから学んでくれると思います。

今から2つ事例を出します。1つ目。僕は今バク転のクラスを学校や地域でやっています。この時に課題が一つあります。バク転なんてやりたくない。別にバク転できなくたって生きていけますが、僕は、その子供たち・大人たちにバク転をやってもらいたいのです。そこには目的があって、バク転をするって難しいかもしれない、怖いな、不安だな、それをどうやって克服して、もしかしたらできるかもしれないぞってという、意識をかえて、その壁を越えてほしいという目的があり、バク転クラスをやっています。そしてバク転クラスのいいところは、僕が実際に見せてあげられる。なので、今日バク転一回見せます。ただ、これを見たからってできるわけではないですが、バク転が実は簡単だっていう事例だけお見せします。

実はバク転に必要なことは、たった2つだけです。バンザイする。その時にジャンプする。このたった2つだけ。信じられないでしょ。皆さんそう思う。だからみんな怖いし不安なので、そのたった2つだけやるのをお見せします。このバンザイするのとジャンプするのは、人類の99%ができるものです。だから僕は、バク転は人類の99%の人ができると思っています。やっていないだけです。だから、その2つだけをやってお見せしましょう。

ではやります。万歳とジャンプ、これを組み合わせます。本当にこれだけです。この組み合わせをタイミング良くやるだけです。物理現象です。例えばこの紙、僕が手を離したら落ちますよね。これ誰がやっても落ちる物理現象です。なので、このバンザイするスピードと方向に合わせてタイミングよくジャンプをすれば、もう体は半分以上回ってバク転がほぼできちゃう。あとは大人の方はちょっと体が重くなっているので、体を支えられるか、それができてしまえば、もうバク転はできるはずです。それをエアバッグ、ちょっと大きなバルーンがありますが、その上でまずは転がって、最初ジャンプすらしない子も、一度エアバッグの上で転がって手をついて足から降りてくる。この体験を一回すると、このたった一回で、子どもたちは「あ、怖くない」ってわかります。僕が授業をやるときに一番初めにするのは「聞く」ことです。「怖い人、難しそうだなと思う人」と聞くと、全員手を上げます。でも、その日の授業はたった45分でも、授業を終わった後に手を上げる子はほとんどいません。この体験一回で自分の殻を破ることができます。バク転をやりたくとも思っていなか

った、難しそうだな、もしかしたら僕に出会わなかったら一生バク転なんてできないって思って殻の中にいた子どもが、たった一回の経験でバク転できそうかもって思います。実際にどんどんやりたくなって、一回の授業じゃ足りなくなっちゃう。そうやって実は関心は変えられる力があるのです。誰に出会うか、どんな人に出会うかです。逆上がりができない子もいっぱいいますが、じゃあやり方を教わりましたか？教わっていないのにできないというレッテルを貼られ、自分で貼り、それを思い込んだままにいるからずっとできない。それを壊してあげるのは、やっぱり違ったやり方を教えてあげる大人や、僕みたいなプロフェッショナルな人です。その権限をみなさんは今持っていらっしゃると思っただきたいなと思います。皆さんがどうやって教えたか、どうやって接したら、もしかしたら生徒や学生の殻は壊れるかもしれないということをお伝えしたいです。

次は僕が今挑戦している農業のエンターテインメントです。これは正直バク転よりも難しかったです。農業に関心がある人、全然多くないです。でも、僕ら人間の根源的なものは食べることです。今、日本の政治は経済成長を追っていますが、農業はどんどん衰退しています。僕の住んでいる地域は過疎化していて、高齢者が多い。あと5年で半分ぐらいの農家さんがいなくなります。そこに土地は荒廃してくる。山の問題、畑の問題、田んぼの問題山積みです。食べるものはありますか？こんなこと言っても誰も農業をやろうとしません。お金があれば、食べ物はもちろん買えます。じゃあコロナが起きたときに流通が止まったら、この国は本当に大丈夫ですか？やばいですよね。でも不安を煽ってもまだ誰もやらないです。だから僕は表現方法を変えました。表現方法を変えて、農に関心がない人にも農を知ってもらう、ちょっと農業体験してもらう取り組みをしかけました。これにはエンターテインメントの力が必要だと思いました。シルクドソレイユに来る人は、1万円も2万円も払って見に来ます。農業も楽しいイベントに変えたら、逆に参加費払ってもらって農家さんの副収入になるのではないかと考えました。それが僕の一つの目標で、そうすると新しいビジネスモデルができたりとか、もしくは実は農的暮らしってやっぱり豊かだったのではないかって知ってもらえたりとか。野菜という新しい投資の方法で、僕がまた一歩違うものを世に提供できるのではないかと考えました。実際、活動をずっと続けて、今もう約2年半になります。ちょっとずつ広がって、約1000人に体験してもらいました。ただ、僕が想像したよりは広がりがありませんでした。なので、ここでも僕は「伝える」って難しいなというのを日々痛感しています。関心がない人に関心を持ってねというのがいかに難しいのかっていうのをすごく痛感するので、ここは常にどんどんアイデアを重ねていって、僕自身が変わっていくしかないのかなって思っています。そうしないと、馬を連れてきても水飲んでももらえないのと一緒で、勉強しろよ、楽しいだろこれって言っても伝わらないので、その人が楽しいって思う方法を僕はこの後もずっと模索していきたいなと思っています。

ただ、成功事例もあります。僕がこうやって地道に活動していったおかげで、大手JTBさんから声をかけていただきました。現在修学旅行生に対する旅行プランの中に、僕らの体験型イベントの提案があり、140名の大型イベントを実施しました。これは一つビジネスモデルになっていきそうです。こうやって地道に活動していると、見てくれている人がいて、面

白そうだなって採用してくれる一つのいい事例になりました。やはりやり続ける、これは一つ重要なことだと思います。これが意外と難しいので、やっぱり工夫していく。この「伝えたい」という思いがどうやったら伝わるのかっていうところまでしっかりとできるといいなっていうのが、僕自身が今挑戦しているところです。

もう一つありました。本気という言葉は伝わるっていうのがあって、こうやって僕、バク転でも農業でも熱い思いが溢れてしまうのです。そうすると意外と伝わってしまうこともあって、言葉だけではなく、伝わってしまう、この熱量ですね。僕の手があんまり格好よくなくても、理路整然としなくても、この熱い想いっていうのが届いてしまうこともあるので、それで人の心が動くこともあります。ぜひその熱い言葉、本気という言葉もぜひ使ってもらいたらと思います。

では今日のテーマの2つ目です。今日のテーマ「自分らしさ」を僕の役者という表現の方法からお伝えできたらと思います。僕はシルク・ドゥ・ソレイユに入るまで演技をしたことがありませんでした。関心すらなかったです。できるかなっていう不安さえありました。最初の演技レッスンで色々なことやります。「落ち葉になってください」と言われます。今僕手で落ち葉を表現しました。これに正解はありません。でも、皆さんが落ち葉かもなって思ってみれば、落ち葉に見えたりもします。では次いきます。これは何を表現したでしょう。実は今、僕はルービックキューブになっていました。今みたいに演技をしてみて、人が何と受け取ったかを見る練習をします。初めからルービックキューブですって言うとなんかすぐに見えてしまう。ですが今僕は、ルービックキューブが回転したり縦に回ったり、色がパッと変わっていく様子を表現しようと思った。それは伝わっているかどうかはちょっと難しいのですが、そうやって体で、非言語能力で表現して伝えていく。シルク・ドゥ・ソレイユって言葉を使いません。セリフがありませんので、体で「楽しい」、「悲しい」を伝えていく。それはすごく勉強になりました。こういうものでも表現して伝えることができる、この楽しさをシルク・ドゥ・ソレイユに入ってからすごく理解することができました。

当時のシルク・ドゥ・ソレイユの監督と、今の僕の役者の監督は同じ人ですが、世界的に有名なロベール・ルパージュ氏です。今世紀最も重要な舞台演出家の一人ともいわれています。彼から言われた言葉がありました。「Don't act, to be」。これは非常に深い言葉でした。僕、演者ですが、演技すると言われて。「なれ」と言われました。これは難しかったです。演じるなって言われます。演じた瞬間に演じようと思って頭が回転して、考えているのです。それを見抜かれます。「なれ」と言われます。だから僕がセリフを間違えてもいい。その代わりに「なって」いけば、その人の感情、その人が伝えたいものが出てくるんだ。だから、セリフを間違いなく言うことを頭の中で考えていると、「なっていない」んですよ。だから「Don't act, to be」と言われます。これ、すごい演出家だと僕が小手先で演じているってすぐにバレてしまいます。僕が出ている舞台、7時間です。長いです。長い中で、僕は多分どこかの瞬間では「なれ」ているし、どこかの瞬間では「なれてない」部分もあると思います。ただ、そういうのは見る人が見たらバレてしまうんですね。だから僕の中でも

うまくできた時もあるし、できない時もあるので、それが生の舞台の面白さでもあり、そういうのを日々やっています。

次はどんどん写真が出ます。これはシルク・ドゥ・ソレイユの時のもので、これ私です。TOTEM っていうショーでしたが、日本人で初めて、そして唯一、ポスターに抜擢していただきました。次、これがカエルです。次、これが猿の役です。動物になる役もやっています。次は70年代のサラリーマン、僕がやっている役の一つです。女性も老人もいます。これは農家さん、こちらはパンクロッカーです。スペイン語をペラペラと喋るパンクロッカーです。これは歌舞伎役者です。シルク・ドゥ・ソレイユ時代、歌舞伎の中村勘九郎さんと共演することがありました。今、僕が出ている舞台で毛振りをやってほしいということを監督から急に言われて、誰に相談したらいいだろうと思ったら、歌舞伎界で唯一知っていたのは中村勘九郎さんで、中村家はこの毛振り、連獅子と呼ばれるものが代々伝わっています。そこで、実際に勘九郎さんという、すごいコーチから直々に教えていただきました。勘九郎さんには、本当に感謝しております。

では、役者が他者にならなきゃいけないというのは、どういうことでしょうか。皆様、演技とか舞台出られたことある方いらっしゃるでしょうか？文学部ですと演劇科とかもありますので、もしくは演技を見るのが好きな方もいらっしゃるのかなと思います。今僕は宮海彦として話していますが、他者になるときは、話し方、姿勢、歩き方、振る舞い、まばたき、呼吸、その人のたどってきた人生をあらゆる側面からなりきります。これは容易ではないです。私は、他人になることを仕事とした時に初めて自分自身を知らないと思いました。知っていたつもりでしたが、全然知りませんでした。僕が今立っている姿勢、呼吸のし方、癖、まばたきの回数。こういう、一度自分を知らないと他人になれないってことに初めて気づきました。自分のことを知っていると思ったから他人になろうと思いましたが、他人になろうと思ったらまず一回全部自分を知り直さなきゃいけない作業が出てきます。この役者っていう職業の面白さ、この他人を知るプロセスが自分を知ることになり、その役柄の人生を考えることで、他者理解と他者寛容が生まれました。例えばさっきのパンクロッカー。スペイン語のセリフがありますが、なんでパンクロッカーになりたかったのか、その人の生まれた環境はどうだったのか、どこで生まれたのか、どういう育ち方したのか、ということ想像します。だからこういう言葉が出てくる、だからこういう気持ちで話さなきゃいけない、ということになっていく。他人になるということは、色々なその人の辛かったり楽しかったりした体験を想像し、人生を一度引き受けて、そこから僕の体を通して表現していきます。みんなそれぞれの人生があり、それが台詞に出てくる、というのを初めて思い返した時に、一個一個の台詞に込められる思いってすごいものがあるというのをすごく感じました。そして今もそうですし舞台でもそうですが、一度発してしまった言葉はもう取り返せません。ですので、今ここから出ていった言葉はもう最後は皆様に委ねるしかなく、だからこそ僕が発する一言一言は大切だなんていうことを常に感じています。

そして僕は今演じています。宮海彦を。皆さんも教壇に立ったら先生という立場を演じていらっしゃると思います。僕はこの世界に演じていない人はいないと思っています。ただ、

どう演じるか。僕は今この場所や舞台で、別人になってもいい場所を用意されたのです。パンクロッカー、ちょっとやんちゃなイメージですよ。ドラッグやっているかもしれない、人に暴力をふるっているかもしれない。それを舞台上では法律を無視して演じることができる。そういう場所を用意されている。普段ではできないようなこと、もしくは言えないような言葉を言う場所を許されているのです。これはすごく楽しいです。自分自身の中に作ってしまった自分から一回それを置いて別の人になり、汚い言葉を発してもいい。もしくは普段だったら言わないような優しい言葉も投げかけてもいいのです。だから別人になるってそんなに難しいことではないです。自分が思い込んでしまった自分を一度どこかに置いておけるかどうかなのです。僕は舞台ですけど、先生だったら教室だったり、もしくはお子さんがいらっしやれば家庭だったり、もしくは部活だったりコミュニティだったり。その場に適した役っていうのがあるのではないかなと思います。それを皆さん演じながら生きていくと思うのです。

その自分という役、「皆さん楽しんでますか？」ということと、「心地いいですか？」というのが僕からの質問です。残念ながら、この日本では自殺者が年々増えています。悲しいですが、事実です。これは何故なのでしょう。僕がこの日本社会を外から見たときに思うのは、いい部分もいっぱいありますが、閉塞感がある社会性も強いということです。なりたい自分になれない社会を私たち自身が作り上げてしまったっていうのも一つの事実だと思います。なりたい自分自身にさせてあげられない。僕が寛容性を持ったらよかったなと思ったのはその部分です。もっとなりたい自分があるのならなってあげて、それを他者や社会が認めてあげる、この社会の実現をしないと自殺者は減らないのではないかと僕は思っています。それだけ苦しい思いを強いているのは社会なんじゃないかなと思っています。先生方も一度、なりたい自分ってどんな人物だろうっていうのも、今日考えてほしいと思います。本当はこういう自分になりたかったのになれていなかったのであれば、一度自分の殻を置いておいて、トイレでもいいです、洗面所でもいいです、なりたい自分にちょっとなってみてください。最初は難しいです。どうしてもここに（架空の）カメラがあるんですよ。カメラがあるから誰かの目を気にしてしまう。だから最初は一人でいいから、なりたかった自分に一瞬なる練習をしてみる。ちょっとずつそれが出てくると、今度は身近な人だったりとか、仲のいい人たちだったりとかに、こういう自分になってみようかなって言うてもいいと思います。言わずにポンって変わるとどうしたんだろうってことになってしまうので、役になってみるんだってことを伝えてみる。「ちょっと僕ね、私ね、こういう風になりたいからこういう風にしてみようかな」って言うてみると、相手はあ、そうか、そういう役になるうとしてるんだなって理解してくれると思うので、いつもと違って恥ずかしくても、大丈夫だよって思ってもらえる環境を自分で作っていく。そういう人たちが増えていくと、どんどんと社会が、他人が変わることにも寛容になっていくのかなと僕は思っているのです。ちょっと今日はそういう手法をお知らせできたらと思いました。

僕がいたシルク・ドゥ・ソレイユの環境ですが、超国際的でした。僕が行ったツアーの中では 25 カ国ぐらい違う国から来ていて、会社全体では 50 カ国ぐらいから

集まっている会社です。異文化コミュニケーションだらけです。言語は移動するショーの中では英語です。ただ、本社はカナダのケベック州モントリオールなので、フランス語もよく飛び交って、むしろ本社はフランス語ばかりでした。そして私がいたショーは世界のトップレベルの方々ばかりなので、超がつく個性的な人たちでした。プライドは高い、頑固、外国人は自己主張が強いです。そんなチームで僕は、キャプテンだったり、コーチになったりと役を任せられました。これは日本人が得意とする分野です。この調和を大事にする。これがちゃんとできるのは日本人の強みです。これを超国際的な会社に入って実感することがありました。僕はキャプテンからコーチという立場に上がったのですが、多分それも、会社が僕を使える存在と認めてくれた、こいつちゃんとチームをまとめるな、その能力が、日本人は高いな、と認めてくれた。日本人だけだと調和すぎて自己主張がなくなっていくという悪い部分も出てきますが、ちゃんと自己主張もしながら、じゃあどうしようかな、と調和を取れるのは、日本人の強みです。

僕がなぜ日本に戻ってきて日本を何とかしたいって思っているかということ、今の国際社会に必要なのは調和だと思っているからです。その調和能力、和を大事にできる、この日本の特性を世界にきちんと発信していける人材がもっと出てほしいと思っています。今政治もそうですが、調和し過ぎていて誰も出て行かない状態になっています。是非そこは外国人を見習ってもうちょっと出ていき、それをまとめる、そういう日本になってほしい。それが今このグローバルな国際社会で、日本の役目だと強く思っています。

ということで、この言葉がもう一回出てきます。馬を水辺に連れて行っても飲まずことはできませんが、本気の言葉は伝わります。とても根本的な問題になってしましますが、発する言葉が本気の言葉なのかどうかということは今一度考えていただけたら、もしかしたら本気度が薄いのではないか、もしくはちょっと手法にこだわりすぎて目的と手法が混同しているのではないかというところがお分かりになるかと思います。

僕がなぜバク転や農タメを選んだかということ、僕が本気になれるものを自分でチョイスしているからです。例えば誰かから受け取った役職だと、僕はその役職を全うするだけの人間になってしまって、本気度が備わらないっていう特性があります。僕自身はそうです。もちろん役職から本気度に入っていくこともあるので、必ずしもそうとは言えないですが、僕は本気になれるものを自分で選んできて、だからこそシルク・ドゥ・ソレイユにも行けたし、本気がちゃんと身になりました。ぜひ自分の沸き起こる思いが溢れそうなものをしっかりともう一度掘り起こしていただくと生徒や学生は結構感じ取ってくれるのではないかな、というのが僕の実感です。これを教えなきゃいけない、もちろんそれもあります。ただ、もう少し僕は自由でいいと思うのです。「あなたの本気は何ですか?」「見せたいものは何ですか?」「伝えたいものは何ですか?」そこにもう一度フォーカスして、これからの時代を担う生徒や学生たちがしっかりとその熱量に追いつくような人間になってほしいな、というのを皆様にお伝えしたいと思います。

僕は今、本当に課題山積みの中で活動しています。昨日、別の学校で学生に、学校楽しい? と聞きました。その学生は勉強がしたくて大学院まで行っているのも勉強していますが、体

感としてはやっぱりみんなが大学に行くからってことで大学に来る子も多いようです。そうすると僕が教員になった時にその彼らに水を飲ませてあげられるのかっていうと、これは非常に難しいのではないかと思います。僕はやりたいことをやっているから、言葉にできて、その熱量が伝わりやすいものを選んでいますが、先生方は難しいところにいるのではないかなというのが僕の今の考えです。ですから、学生がなんとなく大学に行くこの社会システム自体、これも一つ大きな課題だと思っています。これからの時代、本当に大学に行ったからといって、安定した職業だとか、安定した収入が得られるのかも分からなくなっている状態は、若い人たちにも不安ではないかと思います。そういう意味でいうと、僕はこうやって自分の生き方を通して、ちょっと別なことをやっても、ちょっとおかしなことをやっているように見えても、でも生きていけるよね、大丈夫だよねっていうところを見せたいのです。それは一つ、ある意味また別の表現者としての顔です。この生き方をしても生きていける、大丈夫だ、というのは、ぜひ伝えたいもう一つのことです。

実際、僕は今お米を作っています。野菜も作っています。狩猟免許も取りました。銃ではなく、罠の方です。お肉も自分でさばいて冷凍庫にストックしてありますので、食べ物は結構あります。そういう意味でちょっとずつ自給自足率は高まっています。ただ、インフラを自分で作り上げることはできないので、道路だったりインターネットだったり、そういうものは社会のものに頼らなければいけません、食べるものは少しずつ整ってきています。それは一つ、僕の安心材料です。

先ほど農業とエンタメを始めたところでもちょっとお伝えし忘れましたが、僕がこうやって体一つでポンッと熊本県の菊池市に行きました。農家さんと知り合いになりました。僕は農家さんに、あなたの農作業手を伝うから、その代わり野菜くれ、それで余った時間で僕は違ったビジネスモデルを作るから僕に投資してくれと言いました。お金は要求していません。自分のできる、体を使ってできる農作業をする代わりに、野菜をもらって生き延びています。ここから本当にマネタイズができるのか、そこから農業って本当に関心を高められるのかっていう僕の挑戦です。今それが2年半、次で3年目になります。まだできます。生きています。なかなか大きくはならないですけど、ちょっとずつ前に進んではいます。

僕は今、2つの世界に住んでいます。お金が必要な世界と、お金が必要じゃない世界、この両方を行ったり来たりします。自分が住んでいる地域の何人かとは物々交換しています。実は生きていくだけだったら、そんなにお金は必要ありません。ただ、海外旅行に行きたいとか、お金が必要じゃないとできないこともたくさんあるので、その両方をうまく組み合わせて使いながら生きています。この経済依存もちょっとずつ脱却していく人たちが増えると、この日本社会も本当はそんなに疲弊する必要はないのかなと思っています。

今、“2農8リーマン”という新しいプロジェクトを立ち上げました。人生の8割はサラリーマンでいいですよ。でも2割だけ農に関わりませんか？というプロジェクトです。本当に1日1時間でもいいです。ちょっと農作業をしたら、自分が食べる分だけだと、農業って結構できてしまいます。僕も1週間のうちに3回ぐらいしか行かないことも多いです。まとまって作業しなくてはならないことも多いので、半日使うこともあります、トータルす

ると2割使っているかいないかなんです。そんなものでも生きていけます。そういう生き方もちょっと見せながら、皆さんが豊かに生きていけるように、不安がなく生きていけるように、そんな社会が実現できると、日本はもっと輝くと思うし、これからの世界で必要な国になっていくのではないかなと思っています。